２００４年３月３日
主催（財）ミズノスポーツ振興会

「２００３年度 ミズノ スポーツライター賞」受賞者決定

財団法人 ミズノスポーツ振興会（会長：水野正人 ミズノ社長）では、’９０年度より「ミズノ スポーツライター賞」を制定し、スポーツに関する報道・評論およびノンフィクション等を対象として、優秀な作品とその著者を顕彰しています。

３月３日、高輪プリンスホテルで ２００３年度 選考委員会を開き、受賞作品および受賞者を以下の通り決定いたしました。

【ミズノ スポーツライター賞 最優秀賞】（トロフィー、副賞 賞金１００万円）
・「拳の漂流～『神様』と呼ばれた男ベビー・ゴステロの生涯」
城島　充　　（講談社）

【ミズノ スポーツライター賞 優秀賞】（トロフィー、副賞 賞金各５０万円）
・「巨人軍最強の捕手～伝説のファイター　吉原正喜の生涯を追う」
澤宮　優　　（晶文社）
・「『高知競馬』という仕事」　　高知新聞社社会部

詳細は別記の通りです。

（お問合せ先）
（財）ミズノスポーツ振興会　事務局　内橋　　ＴＥＬ：０３（３２３３）７００９
ミズノ東京広報課　小西・大澤　ＴＥＬ：０３（３２３３）７０３７
ミズノ大阪広報課　高橋・土師　ＴＥＬ：０６（６６１４）８３７３

記

名　　称：２００３年度　ミズノ　スポーツライター賞

制 定 目 的：スポーツに関する優秀な作品とその著者（個人またはグループ）を顕彰してスポーツ文化の発展とスポーツ界の飛躍を期待するとともに、これからの若手スポーツライターの励みになる事を願い制定

選 考 対 象：主として新聞･雑誌･単行本などを通じて書かれたスポーツ分野の報道・評論・ノンフィクション等で、当該年度に発表されたもの

選 考 委 員：委員長　岡崎　満義　氏（元文藝春秋社取締役、「ナンバー」初代編集長）
委　員　田　　英夫　氏（参議院議員、元共同通信社 社会・文化部長）
〃　杉　山　茂　氏（スポーツプロデューサー、元ＮＨＫ報道センター長）
〃　松本　千代栄氏（お茶の水女子大学名誉教授、(社)日本女子体育連盟会長）
〃　村上　龍　　氏（作家）
〃　水野　正人　氏（(財）ミズノスポーツ振興会会長、ミズノ社長）
※順不同

対　象　者：日本人および日本在住の外国人

受賞者及び選考理由　：

●「拳の漂流～『神様』と呼ばれた男ベビー・ゴステロの生涯」
城島　充　　（講談社）

昭和２０年代に最強、神様といわれ「無敵の２８連勝」の大記録を成し遂げ時代の寵児ともなったフィリピン出身ボクサー、ベビー・ゴステロの物語である。歴史の狭間に埋もれかかっていた天才ボクサーの再発見記であるとともに、第２次世界大戦が韓国やフィリピンなどアジアの人々にもたらした罪過の検証であり、また、他面、大阪の庶民たちの支え合いの記録にもなっている。
本書の叙述の特色はこの３つのストーリーを重層的に描いている点である。フィリピン旅行記から始まり、取材の経緯を述べ、そこにベビーの華やかなりし頃の足跡が書き込まれていく。いわば３つの時間が交錯しながら大団円に向かっていく。最後はボビーが故郷に残してきた子どもの子ども、ベビーの孫が来日して片田舎のクラブで唱っている、その娘がおじいさんを偲んで泣く涙、そして家庭を顧みないベビーを見限って子供とともに去った元の妻の感慨で終わる。
テーマの独自性、主人公の周辺への視点の広さ、叙述の的確さ、重層的で凝った組み立て方、スポーツを通じて一人の人間の生涯を描き、合わせてその背景となる社会のありようを浮かび上がらせるスポーツノンフィクションというジャンルで、本書は一つの極に達するほどの作品と言ってよいと思われる。

●「巨人軍最強の捕手～伝説のファイター　吉原正喜の生涯を追う」

澤宮　優　　（晶文社）

本書はチームを引っ張り、また鷹揚闊達な人柄で親しまれ、出征したビルマ戦役で帰らぬ人となった吉原正喜の生涯を追ったルポである。著者は熊本工業時代の吉原の足跡からたどりはじめ、いかにして彼が伝説のファイターと呼ばれることになったのか、その由縁を関係者へのインタビュー、そして緻密な資料の検討によって明らかにしていく。
文章は手堅く、フィクショナルな描写を含まない。用いている材料は当時の新聞記事、吉原が書き残したもの、同僚だった川上哲治や千葉茂をはじめ関係者の証言をしっかり押さえている。かの「血糊事件」もしっかり裏を取ってある。貴重な写真を集め、巻末の文献リストも遺漏がない。ノンフィクションの書き方として手本とするに足るであろう。

●「『高知競馬』という仕事」　　高知新聞社社会部

内容は、２００２年度連載の第一部と第二部が地方競馬が抱えている基本的な問題点、とりわけ赤字続きの経営難の中での「地方競馬存廃」問題をむしろ地方財政・経済を正面から取り上げると言うよりは、地方競馬に働いている多くの人々、具体的には直接馬に乗る騎手だけではなく調教師、厩務員、装蹄師、獣医師、飼い葉を栽培している農家、その他競馬場に働く諸々の従業員、警備員など、ふだんはまったく表に出てくることのない「裏方」さんを次々に登場させながら、こうしたたくさんの人たちが働いているからこそ地方競馬が成り立ち、そのことによって実は地方における雇用創出を促し、かつ失業対策などをふくめた経済波及効果を地方にもたらしているということを事実で示しながら、同時に、そこに関わる人々の「仕事」を通して「馬と人とのドラマ」を軸に軽妙な筆使いで上手く描いたものである。
第三部、第四部は、すでに廃止の憂き目にあった地方競馬場とそこに働いていた人たちを哀感をもって追いかけている。
地方競馬の「累積赤字」という「ツケ」が直接競馬に関わる仕事をしている人たちによって引き起こされたのではなく、高度経済成長期における地方行政の「放漫経営」と先を読めない「無責任経営」によって今日の地方競馬、公営競馬の状況をつくり出しているにもかかわらずすべてを地方競馬の「裏方」にしわ寄せしているという「告発」が、かれらの日常の仕事、例えば朝も３時ころから始まる競走馬のトレーニングの日課である「攻め馬」や「はがき一枚分の削り方の違い」でレース結果に影響を与えるという、馬の蹄を調整する装蹄師さんの仕事などを通して描かれている第一部・二部はとくにすばらしい。

以上